

Title	認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサポートプログラム開発
Author(s)	山本, 美輪
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49880">https://hdl.handle.net/11094/49880</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	やまもとみわ 山本美輪
博士の専攻分野の名称	博士(看護学)
学位記番号	第22815号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサ ポートプログラム開発
論文審査委員	(主査) 教授 阿曾 洋子 (副査) 教授 三上 洋 教授 井上 智子

## 論文内容の要旨

## 【目的】

本研究は一般病院勤務看護師が認知症高齢者への身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサポートプログラム開発を最終目的とする。

研究1：認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマ因子とそのジレンマへのコーピング（以下ジレンマ・コーピングとする）因子を明らかにする。

研究2：研究1で明らかとなったジレンマ因子とジレンマ・コーピング因子の関係を看護経験年数別に明らかにし、身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサポートプログラムに関してその対象を明らかにし、枠組みを検討する。

## 【研究方法】

## 1. 調査対象者

一般病院勤務看護師340名（精神科、小児科、産科、外来、手術室、ICU等の救急救命棟は除く）である。なお、一般病院の選定基準は1）看護部門が独立し、看護職がその責任者である、2）看護職の卒業後研修・教育が行われている、3）対象者となる看護職の雇用条件が類似している地域の基幹病院（関西圏下の3病院）である。

## 2. データ収集

自作質問紙による留置調査で、調査期間は2006年12月から2007年3月である。

## 3. 分析方法

研究1：認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマスケール20項目とそのジレンマに対するジレンマ・コーピングスケール16項目を作成し、探索的因子分析を行った（最尤法 エカマックス回転 Bartlettの球面性検定）。

研究2：研究1で明らかとなった認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマ因子とジレンマ・コーピング因子との関係を経験年数別に（ベナーの臨床看護実践の習得段階を参考に看護経験年数の1～2年目（n=54）を「初心者・新人群」、3～4年目（n=57）を「一人前群」、5～7年目（n=51）を「中堅群」、8～35年目を「達人群」（n=100）とした）Pearsonの相関係数（有意水準0.01）にて明らかにした。

## 【結果】

## 研究1

調査票は340名に配布し、291名（85.6%）から回答を得た。女性は272名（93.5%）、男性は7名（2.4%）、無回答は12名（4.1%）であった。男性7名を除外し女性看護師272名を有効回答とした。回答者の平均年齢は29.8±7.6歳であり、看護経験平均年数は6.5±6.5年であった。看護系教育での修了校は、専門・専修学校が最も多く231名（89.9%）であり、短期大学は20名（7.8%）、大学が1名（0.4%）、無回答20名（1.9%）であった。

自作した認知症高齢者への身体的抑制時に対するジレンマスケール20項目の信頼性係数Cronbach  $\alpha$  は0.87、ジレンマ・コーピングスケール16項目の信頼性係数Cronbach  $\alpha$  は0.78であった。

ジレンマ20項目の探索的因子分析は、20項目中15項目を用いたところ初期の固有値1以上の因子は4つ抽出され、累積寄与率は79.1%、Kaiser-Meyer-Olkin値は0.84、Bartlettの球面性検定は $p=0.000$ であった。第1因子「治療遂行と安全・安楽確保に関するジレンマ因子」、第2因子「認知症高齢者への対応に関するジレンマ因子」、第3因子「協働関係上でのジレンマ因子」、第4因子「看護業務中の優先順位に関するジレンマ因子」と名づけた。

ジレンマ・コーピング16項目の探索的因子分析は、9項目を用いたところ初期の固有値1以上の因子は2つ抽出され、累積寄与率は65.9%、Kaiser-Meyer-Olkin値は0.79、Bartlettの球面性検定は $p=0.000$ であった。第1因子「自己解決型ジレンマ・コーピング因子」、第2因子「回避型ジレンマ・コーピング因子」と名づけた。

#### 研究2

研究1より明らかとなったジレンマ因子4つと、ジレンマ・コーピング因子2つを用いて因子間の関係を看護経験年数別にて、Pearsonの相関係数にて求めた（有意水準 0.01）。

その結果、初心者・新人群で有意な正の相関がみられたのは自己解決型ジレンマ・コーピング因子と治療遂行と安全・安楽確保に関するジレンマ因子（ $r=0.42$ 、 $p=0.002$ ）であった。回避型ジレンマ・コーピング因子と有意な負の相関がみられたのは協働関係上でのジレンマ因子（ $r=-0.39$ 、 $p=0.005$ ）であった。一人前群と中堅群では有意な関係はみられなかった。達人群では自己解決型ジレンマ・コーピング因子と有意に正の相関がみられたのは協働関係上でのジレンマ因子（ $r=0.29$ 、 $p=0.004$ ）であった。

#### 【考察】

##### 研究1

自作した認知症高齢者への身体的抑制時に対するジレンマスケール20項目とジレンマ・コーピングスケール16項目は、統計学的に信頼性、妥当性が示唆された。

ジレンマ因子として抽出された4因子と、ジレンマ・コーピング因子として抽出された2因子は、先行研究と類似した内容であったことよりジレンマ因子、ジレンマ・コーピング因子として妥当であると考えた。

##### 研究2

ジレンマ因子とジレンマ・コーピング因子の関係で、有意な負の相関は、初心者・新人群の回避型ジレンマ・コーピング因子と協働関係ジレンマ因子（ $r=-0.39$ 、 $p=0.005$ ）であった。これは、初心者・新人群は、認知症高齢者への身体的抑制時に看護師が抱く協働関係上のコーピングができていないと考えられる。これよりプログラムの介入対象は初心者・新人群で、認知症高齢者の身体的抑制時に看護師が抱く協働関係上のジレンマへの回避型ジレンマ・コーピングを自己解決型へ転換できるようなサポートの必要性が示唆された。今後は、対象者の教育背景別に分析を行い、サポートプログラムの導入方法や内容、プログラムの一般化に関する検討を行っていく予定である。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は、一般病院勤務看護師が、認知症高齢者への身体的抑制時に抱くジレンマへのサポートプログラム開発を最終目的とし、研究1として認知症高齢者看護における身体的抑制時に看護師が抱くジレンマ因子とそのジレンマへのコーピング因子を、研究2として研究1で明らかになったジレンマ因子とジレンマ・コーピング因子の関係を看護経験年数別に明らかにし、身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサポートプログラムに関してその対象を明らかにし、枠組みを検討することである。調査対象者は、一般病院勤務看護師340名で、291名（85.6%）から回答を得た。その結果、自作の認知症高齢者への身体的抑制時に対するジレンマスケール20項目とジレンマ・コーピングスケール16項目は、統計学的に信頼性、妥当性が示唆された。ジレンマ因子として抽出された4因子と、ジレンマ・コーピング因子として抽出された2因子は、先行研究と類似した内容であったことよりジレンマ因子、ジレンマ・コーピング因子として妥当であった。そして、ジレンマ因子とジレンマ・コーピング因子との関係で、有意な負の相関は、初心者・新人群の回避型ジレンマ・コーピング因子と協働関係ジレンマ因子（ $r=-0.39$ 、 $p=0.005$ ）であった。これより、初心者・新人群は、認知症高齢者への身体的抑制時に看護師が抱く協働関係上のコーピングができていないことが明らかとなり、プログラムの介入対象は初心者・新人群で、認知症高齢者の身体的抑制時に看護師が抱く協働関係上のジレンマへの回避型ジレンマ・コーピングを自己解決型へ転換できるようなサポートの必要性が示唆された。

本研究のように、認知症高齢者への身体的抑制時に看護師が抱くジレンマ因子とそのジレンマへのコーピング因子を明らかにした先行研究はなく、新発見であり独創的であるとする。また、身体的抑制時に看護師が抱くジレンマへのサポートプログラムに関して、その対象を明らかにし、枠組みを検討することは、今後増加すると考えられる認知症高齢者への看護に対する実践として活用できるという有用性があり、看護学的意義がある。これらの点から、本研究は看護学博士の学位授与に値すると考えられる。